らん事を欲す。(安心の神)

問　耶蘇基督に就て如何なる信認の差異ありや。

答　正統派に在て、基督は人間に非ず、即ち三位一躰の一にして、無論完全圓滿にして無限無究の聖子たる神なりと信ず、何となれば耶蘇の此の世界に產れざる以前、猶太國に於て神は古代の豫言者と既でに聖子を人類の救主として降し玉ふ事を豫約せりと爲し、彼れは其の生涯の言行に於て(說教と奇跡)又死後三日にして蘇り、肉の儘昇天せし大奇跡あるに依りて自ら神たるを證せりとす。(人なる神)

然れども唯一敎徒は耶蘇を以て全然人間なりとせり、何となれば彼れ既でに人の形躰を以て人間の世の中にヨセフとマリアなる夫婦の愛兒として出產し、其の眠食居坐一として吾人と異なる處あるを見ず、況んや其の傳記を一覽すれば、或は喜び或は悲み或は恐れ或は祈り或は飢へ或は疲勞し或は死を厭ひて悲鳴を發して上帝の救護を乞ひ、其の死するや尋常一樣の人と異なる事決してあらざりし、斯の如き事狀悉く普通人間と差異あるを見ざるに何ぞ疑惑百出の奇跡談のみにより、直ちに神なりと云ふを得ん、要するに正統派と唯一敎徒の分岐せる由緣此の點に有りしものにして蓋し神の定義を根本的に異にせるを以て起れる必然の結果なるべし、吾人は如何に千萬熟慮するも、神は自ら祈りて自己に救護を求む可しとなし、或は人間の爲めに十字架上に非命の最後を遂げ得可しとは、何處の心裡を叩くと雖も想像し能はざる處なり、然るを況んや、其の神は恐に、天則(即ち自己の意思)を變更し、水を以て酒と化し、死して三日の後肉の儘天の玉坐に復位せりとの妄

説を眞面目に信認するを得可けんや。(人なる耶蘇)

問　基督を人間とせば彼れの教訓を信仰し得るや。

答　正統派にて宗教的教訓は神勅に非ずして單に人間の口より出でしものたらば如何に正當なる理論と雖も悉く之れを否定するが如し、何となれば耶蘇にして若人たらば、斯る大言放語を爲すは天を蔑視する者たりとなすを以てなり。(血統信仰)

然れども唯一教徒は何人の口より出づるものたるも、正理にして公道に適ふ者は之れを信認する事、恰も正統派の信者が神の默示として信ずると毫も遜色あらざるなり、吾人は耶蘇の教訓を信ずるは彼れは神の子たるが故に其の教訓は善美なりとするに非ず、換言せば吾人は師匠の血統を彼れ是れと論じたる後、師の言に就くに非ずして、師の訓諭にして吾人の心靈を滿足せしむる天父の法規に適ひ、吾人の見て以て正理公道なりと認識するが故に、信仰するものなり、故に耶蘇の血統の甲たり乙たるが爲め直ちに動搖するが如き信仰は、所謂砂上の家屋に等しきものにして、吾人は人間の道理心の上に基礎を確定したるものなれば、人間の道理心と其の運命を共にするものなり。(血統を信ぜず實際道理を信ず)

問　基督の死に就て意見の差異は如何。

答　正統派にて基督は萬民の罪を購はん爲め、自ら罪なき身を神の前に犧牲に捧げ、以て神怒を和らげたる者なれば、人にして基督の神たるを信じ、彼れに身も靈も委ぬる時は、彼れの血に依りて人間の罪科は盡く洗淨せられ、神の前に義とせらるべし、夫れ神が人類の罪惡を怒り玉ふ事は自己の義に對して怒る者にして、基督の如く潔白無垢の命を犧牲に供するに非れば、決して仁恕す可からず、故

に神は己れの義を全ふし、又己れの愛を全ふせんが爲め自ら肉躰を就つて此の世に降り、自ら犧牲となりて萬民の罪を贖なへりとす、(他力贖罪)

唯一教にては斯る野蠻時代の人命御供を献ぐるを以て、其の怒を和らげるが如き邪曲の神を信ぜさるあり、況や自らの義心を滿足せしめんが爲め、自ら犧牲となるが如き、外見のみを飾る神は之れを信ぜざるのみならず、斯る虚飾、詐僞、淺薄なる事物は賣主者の言として見る可きも、純潔正義の神の設計としては吾人の承認す可からざるものなり。故に吾人は自己の負ふ可きものを他人に委する者に非ず。(自力の革進)

問　人に就て如何なる差異ありや。

答　正統派にては人はアダム及びイブの原罪を遺傳し來れるを以て、人は生れなから神の前に不義者たり、故に人生は全然墮落の極度にありとせり。(人生墮落説)

然れども惟一教徒は決して斯る古代の小説的口碑に拘泥せず、進化の理法により、人は劣等より高等に進歩せしものにして、今猶ほ進歩の中途にあり、故に人生は墮落に非ず反て昇進せりと信認す、(人生進化昇進説)

問　歴史上人間は、最初高等にして漸次末世に至るに從ひ墮落せりとの證據ありや。

答　否な、吾人は人間社會の歴史上墮落に非らず、反て昇進せる事實を證明するに餘りあり、誰れか石器時代の人種は黄銅時代の人種より高等なりと云ふを得ん、況や鐵器時代蒸氣、電氣時代の人種は石器と素燒の土器を弄する時代より劣等なりと云を得んや。又一個

人の歴史に就ても、誰れか核提の稚児は丁年にして教育を施せる人よりも躰力智力將た道徳力に於て劣等なりと云ふを得んや。況や。人類は勿論、生物一般の胎生中は、生熟出産後よりも萬事に於て高等なるを得ん、惟ふに黄金世界を過去に追懐するは人間の弱點にして、天保時代の老翁は維新前に物價の下直なりしを誇ると一般にして、知らず當時に於ける人命の如何に廉價なりしやを要するに衣食住の不廉なるは、人命の貴重なるに職由せるものなるが故に往古に比して吾人は如何に生命財産の安全なるかを思へば彼の人生の黄金世界は遙か將來にあるものにして過去にあらざるや勿論なり。

問　宗教の起原に就て如何なる差異ありや。

答　正統派の信ずる處にては宗教は須らく天啓ならざる可からず、然らざれば此の罪悪に充滿せる人間は決して完全無缺なる宗教を確立す可からず、故に基督耶蘇(神)は自ら肉躰を就りて此の世に降臨し、以て天上天下獨尊の宗教を人間に下賜し、以て千古不變の教法を確立せりと爲す。(狹義の天啓説)

今若し天啓無謬の宗教にして萬世不易のものの世にありとせば、唯一教は無論之れを歡迎するに躊躇するものに非ずと雖も、如何せん世上實際斯る理想的宗教の現存なきを、故に吾人は苟も認めて以て眞理なりとす可き宗教上の議論は、天啓たれ人爲たれ、何にても之れを尊信するものなりと雖も、實際人間社會の出來事は、萬事人爲を以て解釋するのゑ、遙かに天啓論を以て解釋するよりも穩當なるを覺ふ、故に吾人は宗教も亦他の人事界の出來事の如く、人間發生以後に起りしものなれば、固より人爲として敢て差支なき

のみならず、幼稚の宗教の姿の儘にて千古不變ならんよりは、寧ろ日々に新にして又日に新たなる人生と、相並行して將來に限り無く發達生長せん事を企望するものなり。(人爲或は廣義の天啓)

問　基督教と他宗教との關係に就ての差異如何。

答　正統派に在ては基督教のみは、天啓宗教の完全なるものとするも、他の諸宗教は人爲的にして不完全なるのみならず、救道に入るは此の宗旨を措て他になきものなりとす。(排他主義)

唯一教にては、單に基督教のみを以て天啓なり完全なりと云ふを否定すと雖とも、他の宗教も亦基督教と共に、人心自然の活泉より噴出せしものなれば、固より基督教と共に正邪混交するものにして、等しく兄弟宗教なりと認識す、只だ其の行はれし國々の文化の程度と、其の奉教者の智識の程度により、之れが改良を加へしと加へざるとの差を生じ、始めて優劣を區つ可きものなりと雖も、根本的に邪教として排斥すべきものに非ずと信ず。(寛容主義)

問　天啓の字義は如何なる程度にありや。

答　正統派にては天啓の字義を以て狹義に解し、單に宗教即ち基督教にのみ限界し、且つ天啓に非ざれば宗教として眞の價値なきものなりと爲す。(宗教的事物に限る)

唯一教に在ては天啓の字義を廣義に解し、苟も神の宇宙に於て、萬象の上に現はるゝ眞理を覺知するは、即ち天の啓示を蒙るものなりとするも差支無しとす、然れども是れ單に宗教界の事物のみに止らんや、物理學も化學も動植物學も、皆な盡く造化の工妙を吾人に垂示せるものの學びたるに非ずして何ぞや、故に宗教は神の靈人心の上に示現せる事物を了解したるものとせば、科學の眞理

も亦天啓に非ずして何ぞや、蓋し其の差異は正統派に在て天啓は或る宗教的の事物にのみ一定の人と一定の時代とに於て人類間に降下せりとし、吾人は之れに反して萬事萬端の事物の上に、神は古今を撰ばず、東西を問はず、賢不肖の差別なく無限の天啓を間斷なく降し玉ふものなりと解するに在り。(宗教的事物に限らず)

問　聖書に就ての差違は如何。

答　正統派に在て新舊兩約全書を以て神の默示となし、完全なる宗教的眞理を人間に訓諭せし神勅なるを以て、固より一點一畫の誤謬なきのみならず、人間社會は之れに則り萬般の標準とし、就中宗教的事物の大憑據なりとせり。要するに正統派にては神の默示と完全と無謬とを單に聖書と稱ふる一部の書物に限るに在り。(單獨に聖書を信ず)

唯一教にては聖書は古代の人間の宗教的經驗と推測とを記錄せる書籍として、固より誤謬あるを免かれず、而して普通一般の書籍の如く各々其の著者ありて全く人爲的に著作せるものなりと雖も、宗教的事物の記錄としては實に有數の價値のある書籍なりとす、然れども之れを以て今日實際の世界に盡く應用する能はざるは恰も『古き皮袋に新しき酒を藏す能はざる』が如く、小兒の衣類は大人の着用に不便なるが如き點少しとせず、故に之れを以て盡く今日の人間社會の事々物々の標準となす可からずとなす、加ふるに聖書のみならず、社會に有益なる書冊、就中宗教道德に關する書籍は、廣き意義に於て一般に神の默示とし又或る程度迄では完全にして誤謬少なきものたるを得可し、然れども吾人は之れによりて聖書中の眞理にして誤謬なき論點を毫も損害するものに非ずと

信ずるに在り。(廣く一般の經書を信ず)

問　創世記の記事に就て意見の差違如何。

答　今日多少學識ある者は嘗ひ正統派の信徒と雖も眞面目に六日開世界創造說、アダム、エバの說、エデンの樂園說、ノアの洪水說幷に其際製造せし方舟說等を信認するものなかるべしと雖も、彼れ等の信認する教義、就中神の屬性、人類の墮落、惡魔、救罪、四海兄弟說、十戒の起源、宗教の天啓たる由緣等は通例此の舊約書の口碑より來れるものなるが故、勢ひ其の記事を悉く創世記の古話なる一言下に抹殺し盡すを躊躇し、世界六日創造は六千年なり、唐の禹帝時代の洪水とノアの洪水と殆んど相似たりとし、種々牽强附會の說を爲して之れを辯護するは、一般に正統派信者の通癖なるが如し。(頑固)

然れども唯一教徒は如此小說的記事は古代幼稚時代に於ける宗教的概念と政教一致の當時の狀態を口碑より集錄せるものとして、一篇の宗教的古話小說と見るに過ぎず、何となれば人類は是非と斯の如き幼稚の時代を經過せざれば、丁年の時代に達する能はざるを以て、一時斯る無邪氣なる口碑も眞實として承認せらるゝは、有り得可き事實なり、然るに今日斯る兒戲的說話を彼れ是れ辯護するは、寧ろ徒勞たるを免がれず、況や之れに種々なる不理窟を附會するに於てをや、故に吾人は――幼稚の歷史は幼稚の時代と共に過ぎ去らしめ、丁成の時代には丁成の活歷史を作らしめよ――と云ふに過ぎざるなり。(快活)

問　若し宗教を以て、如此古話小說的口碑の上に發達せりと爲さば、大に宗教の威嚴を剝脫するものならずや。

答　正流派にては或は斯る懸念を以て、飽く迄でも聖書の誤謬を主張

するなるべし、然れども吾輩の見を以て見れば、敢て憂るに足らざるべし、若し宗教は見識に等しき劣等なる神話より發達せるが故に之れに威光あるなしとせば、吾輩は敢て斯る空虛なる威光を貧らんとは思はざるものなり、現に近世威光赫々として智識界を威壓せる天文學者の遠大なる智識と化學者の精致嚴密なる智識とは最初虛妄なる卜星術と無謀なる煉金術とに起原せるものに非ずや、彼の有名なるダーウヰン、スペンサーも、最初は一滴の「アミーベ」(原生質)にして、コロンバスも亦イタリヤ海邊の荷足り船の炊夫に過ぎざりし、況や其他をや、最初貧家の腕白小兒たりしの故を以て、關白秀吉の威光を左右すべきの道理あらんや、蓋し彼の進化論を忌む人の感情は、只だ人類は狒猴より進化し來れりとすれば、自己の飼犬に迄で面目なく感ずる一片の感情のみに就て云云するに過ぎざるものにして、此の如き怯弱なる感情は、眞に眞理を曲解し正道を廢頽せしめ、將來人間社會發達の運命を阻礙するものと云ふべし。(甲は聖書無謬主義、乙は誤謬あるものなりとす)

問 宗教的奇跡の問題に就て如何なる差異ありや。

答 正統派にては聖書を以て無謬なりとするを以て、奇跡も亦實際歴史的實事として認むるものたりと雖も、之れ單に預言者、耶蘇幷に聖書所載のものゝみに限り、他宗に於ける奇跡異能は盡く否定し、或は時として惡魔が神に倣ひて人心を迷惑するものたるに過ぎずとす。(狹義の奇跡を信ず)

唯一教に於て奇跡の字義を廣義に解釋すれば、宇宙間一として奇ならざる無し、故に悉く之れを奇跡異能の現象と見做し、就中、人の生命なるものは、奇跡中最奇にして、人は以て此の世界を靜止せし

め、又以て此の世界を回轉せしむるの力あり、(コーペルニカス及びガリレオ以前地球は靜止せりとし、以後は地球を回轉せりとなす蓋し前後兩說とも理論にして、實際地球以外より觀測實視せしに非ざるべし、然れども人智の向背に依りて靜止回轉に化す故に斯く云ふのみ)、然れども所謂新舊約書所載の奇跡の如きは吾輩の全然承認する能はざる處にして、是れ未開幼稚の時代には往々有り得べき過信の結果にして、之れを以て歷史的事實なりと信ず可き論據ありとせば、余輩も亦龍の口殉難記中の奇跡、其他各宗の奇跡も盡く歷史的事實たりとすべし、而して我輩は新約全書所載の奇跡の如きは、十中八九は一種の比喩的記事の文躰と見做すに躊躇せず、何となれば基督が猶太國の宗教觀に一新機軸を樹てたるは、蓋し猶太國人の徒に物質即ち肉にのみ恃み、外形の儀式に拘泥せるを、彼れは心靈的に轉他せしめんと勸めたりしものなれば、基督教の精髓は肉に非ず靈なり、彼れ靈の糧を數千人の心靈的饑餓に供給せしものに過ぎず、何ぞ肉の糧を與ふるが爲めに辛苦せんや、其他病を醫すると云ひ死を甦生すると云ひ、凡べて心靈の覺醒心靈的治療を加へたるに非ずして何ぞや、然るに彼は之れを奇跡として、肉の甦生肉の療病と附會する者は、所謂基督を靈より肉に墮落せしめんと勉むる者に非ずして何ぞや、故に余輩が聖書を讀む時は靈眼を開かんが爲めに文字を素讀せず、其の精神を讀む者なり。(狹義の奇跡を信せず)

問　洗禮に就て意見の差違ありや。

答　正統派に在て、人若し洗禮を受けてアダム以來の遺傳的罪障を盡く洗淨して、基督の教會に加盟せずんば、如何なる善人にても善人

たるの價なく、隨て救の道に在らざれば、死後審判の日を俟て無限永究の苦行を地獄に於て受く可しとす、故に此の禮や人生の一大要件にして嚴肅なる可きは勿論、或る教會に於て頑是なき小兒は未だ悔改の思慮なきものとして、斯る嚴肅なる禮典に與る事を許さずとせり、要するに人悔改の念を起し、教會に加入せんとする時は必らず先づ施行せられざる可からざる一大事件にして、是れ即ち正統派基督教會の關門たり。(洗禮は試金石)

唯一教に在ては洗禮を以て敢て教法の一重要件となさゝるものなりと雖も、加盟企望者にして自ら洗禮を受けて入會せんとする者に向ては強ち拒絶する程の事もなかるべし、元來耶蘇が曾て傳道を開始せんとするの當時ヨルダン川畔にて洗禮のヨハネより此の禮を受け、又其の徒弟に向て福音を傳ふると同時に、此の禮を

行ふべしと命じたる事あるより、基督教徒は恩師の在世中施行せられたる一種の身潔の禮の風俗を以て、彼れの徒弟と他の者との區別法となせしに過ぎざるなり、故に吾人の眼より見れば彼の佛家は印度敬禮の風俗合掌を以て佛を拜するの禮と徑庭あるものに非ずとし、單に其の教法に附隨せる一種の風俗たるも、之れに依らざれば以て救濟の道を成就す可からずと爲さゝるなり、我が國にて罪人又は花流社會に在りし者が、一旦舊慣を脫し、正業に就くが如き場合を稱して『足を洗ふ』と云ふが如きは、心の淨化を以て肉躰の足の不潔を洗淨するに比するが故に、强て或る禮法を採用せんとせば、足のみを洗ふも可なり、全身にても、頭髮にても敢て關する處あるに非ず、然れども本來吾輩の信仰は、如此外形の儀文に流れんより、寧ろ精神的の熱心なる靈火の洗禮を以て勝れりとなす

ものなり、故に唯一教にては入會者の所望に非れば、一切の儀式は必用とせざるなり。(本人の所望に任す)

問　祈禱に就ては如何なる意見の差異あるや。

答　正統派にては祈禱を以て、神と人との交通となし、祈禱に依り隨分事物の成効せし例證を擧げ、以て祈禱は必らず神の傾聽を促がし、且つ之れによりて天祐を得るものなりとし、或は日々の勤業として或は食卓に就く時の如きは必らず祈禱し、或は日曜日其他の宗教的集會の席には必らず祈禱を以て始め、祈禱を以て終るの常則あり、(神の必聽を期す)

唯一教に於ても亦之れと同一の考を以て祈禱を爲す宣教師も少なからずと雖も、余輩は祈禱に就き眞に世人の想像するが如き、直接の効力あるものなりや否やの點に於て、大に疑なきに非ず、現に基督が教會或は街の隅に立て、高聲に祈禱をなすを戒められたるを以て見るも、今日彼れの言行を一も二も無く人生の尺度定規となせる人々が、形式的の祈禱は大に謹まざる可からざる筈なりと思考す、況んや祈禱其のものに依りて、神の傾聽を促がし、自己の所願を成就せんとするが如きに至ては、不理屈も亦甚だしと云ふ可し、何となれば神は既でに此の宇宙の成立以前より、其の天則律法を制定せられたり、一例を云へば勞する者には之れに相當なる報酬あり、因果の應報は了然として斷定め玉へり、然り而して人若し或る結果を得んと欲せば、必らず先づ其の原因を蓄積せざる可からず、然かする時は祈らずとても必然的に期せずして天祐を蒙る事明らかなり、サリトテ余輩は善意の祈禱を以て、全然天昏に達せずとは斷言する者に非らず、何となれば此の如く宏大無量の神の

名を呼ぶの祈禱に非ざるも譬ひ極微細少の人心の運動と雖も、此の宇宙は全躰にして人心は其の一部たる限り、一部の運動必らずしも全躰に皆無關係なりと云ふを得ざるべし、然れども其の關係より生ずる結果の微少細末なるは、僅かに皆無と間一髪を隔つるのみと云ふに在り、故に曰ふ、祈禱は即ち人心の運動にして、此の運動は必らずしも宇宙の大原因たる神と全然無關なりと云ふ能はざるも、其の細微にして皆無と等しく、且つ其の願望を達せんとするに當てや、祈禱以外に神は既でに其の道を設けられたりと論ずるに在り、(必聽を期せず)

問　祈禱の効用の有無如何。

答　今左に理學の大家ローベートソン氏の所說を引き、祈禱に依り物質界の上に一の新變動を起さしむるの如何に困難なるやを說明せん、曰く『試みに吾人をして海邊に於て、波浪の爲めに陸上に打ち上げらるゝ處の一ツ砂礫をして、猶ほ三尺斗り陸上に高く打上げ玉へと神に祈求せんに、神は此の祈禱を聞かんが爲めに、如何なる作用を爲さゞるべからざるかを驗せしめよ、彼の砂礫は波浪の力に依て陸に打上げらるゝものなれば、今之れを猶ほ三尺上方に押し上げんには、先つ神は此の原動力なる波浪をして之れに適宜なる勢力を與へざるべからず、而して此の波浪をして動搖の度を高めしむるに當てや、次に波動の原動力なる風力をして尙ほ一層强大ならしめざるべからず、次に風力の原動力なる大氣の熱度に異變を來さゞるべからず、次に大氣熱度の原動力たる遠き太陽の熱度を變化せざるべからず、如此順次其原動力に溯りて變化せしむるに非ずんば能はざるなり、故に神は一砂礫をして今打上げし處

より猶ほ僅に三尺の高度に押し進むるに當てや、世界創造は勿論宇宙創造の時より豫め用意周到ならざれば得へからす、且つ此れと同時に此の砂礫を三尺上方に押し上げしより、未來永遠に至る迄で之れに伴ふて起る處の結果をも變化せざるへからざるに至るべし、然らば今天然に行はるゝ處の一小出來事を變化せん事を神に祈求するは則ち、神に向て宇宙創造の始めよりの天則に一變動を起さしめ、神の豫め定め玉ふ處の將來の運動にも亦永遠の變化を起させ玉へと希ふに等しく、理學上決して神は許す能はさるものたるや萬々明瞭なり』と

顧て今實際に照して之れを驗するも、亦斯の如き兒童的祈禱は神の聞召し賜はざる實例を知るに容易なるべし、茲に豐作を祈る農夫あらんに、毎日神饌供物を捧けて神慮を慰むると雖も、必すしも

毎歳の豐作を期すべからず、時として神は隣家の不信心なる者のゝ田畑に幸し、反て熱心なる祈求家の田畑を災ふ事例等往々にして之れあり、此の如く神は吾人の懇求を傾聽し玉はざるにも係らず、猶ほ吾人の胸中依然として他物に依頼するの動念休止せざるあり、斯る場合に當り吾人は靜坐して仁愛の源泉たる天父の前に拜跪する時は、今迄で憂悶に堪へ兼ねし心を翻へして、再び人生の艱苦を忍を得るの勇氣を皷舞せられ、或は之れが爲め死地に臨むも敢て屈服の色なきのみならず、死と共に凱歌を歌ふを以て非常なる愉快を感ずる事あり、惟ふに斯る場合に當りて、人は祈禱の方便により、自ら強しと感ずるものにして、所謂反響或は反射的作用により自ら強しと信じて強くなるものたるに過ぎざるべし。約言せば正統派の祈禱に對する意見と、余輩の意見とは、甲は神の必

聽を信じ、隨て之れが爲め物質的の上にも神の特別なる變動を起さしむるものとし、且つ祈禱を以て日常の課業の一となすが如き形式に陷るものにして乙は全く神が口頭の祈禱を傾聽せざるものにして隨て之れが物質上に變動の起る可きものに非ず、且つ形式的の祈禱は自己の感情を滿足せしめんとする一種の方便として輕く之れを見做し、神は吾人の企望を聽納し玉ふ可き他に道ありと信ずるものにして、此の道とは人々の力行なり、故に余輩は智識的、道德的及び職業上の勤勉は即ち活ける祈禱なりと云ふ。(反射的効用を認む)

問　信仰の標準に就て如何なる差違ありや。

答　正統派に在ては、各々一定の信仰箇條なるものを制定し、以て動かす可からざる信仰の箇條とす、故に之れを盡く信ずるに非ずんば、以て正統なる教會員たる事を許さいるものなり。(信仰々條を有す)唯一教に在ては全く信仰の標準を定む可き信仰箇條を制定せず、反て各人各自心靈の判斷に一任するものなり、何となれば古人が自己の信仰を以て後世の人を厭制すべき權利無きのみならず、古人が最初其の信仰を確定せしも、亦各自心靈の判斷を以て正當なりと認めしに過ぎざれば、今人と雖も亦古人に倣ひ自己の心靈の認容する處を以て、信仰の標準を立つ可き者たるや明らかなる事實たるべし、任他古人の制定せし信仰々條にして、正しく誤謬なしとするも、斯る神學の博士等が額を鳩めて、他年の辛苦經營を積みて、宗教上の事物を數條の信仰箇條中に蒸溜せしものを以て之れを初心の宗教入門者に向ひ充分信仰すべしと强ゆるは、恰も帝國の憲法學者等が他年辛苦の結果として成立せる、帝國憲法を老練

や小兒に向ひ全然信認すべしと強ゆるに等しき者にして、老組兒童は眞心より之れを以て、帝國治安の基礎なりと信ずとするも、何を以て斯る隨信よりして活ける解信を望む可けんや、況や神學上の艶曲にして高尚幽玄なる箇條を、胡椒丸呑みに信ずるに於てや、故に唯一教に在ては敢て斯る羈絆を制定して、人心の自由を拘束せず、只だ人心自然の法則として、正義公道の中心點に人心の流注する事恰も水の低に就くが如しと信ずるのみ。(信仰ヶ條を有せず)

問　救の道に關して如何なる差異ありや。

答　正統流にては、人にして如何に宿世の罪業深きものと雖も、悔ひ改めて主なる基督を神として信仰し、洗禮を受けて教會に列し、各教會所定の信仰ヶ條を一意專信する者は基督が十字架上に流せし血によりて、其の人の罪科は購はれ、神の前に全く潔白なる者となり、死後審判の日の後は、究りなき榮耀榮華なる天國に至り、未來永劫神の左右に奉事するの樂ありとなす、(他力救濟)

唯一教に在ては、人若し眞實に前非を悔ひて、基督の如き仁愛の生涯を送らんと期する者は、已でに天國の門戸に一歩を蹈み入りしなるが故に、以來益ゝ勉めて自己の内に潜在せる靈光を發揚し、同胞の爲め人類の爲めに盡し、死をも辭せざるの熱心を其の行爲に顯はせる者は、既でに天國の住民なりとし、敢て天國に到るに死後を俟つ可きものに非ず、之れに反して人日々に其の惡行を寡り、再び此の世にて悔改の道念を起すの機會を失ひ、自己の爲め又他人の爲めに不利益なる行爲と思想を抱ける者は、既でに地獄に墮落せりとなす、何となれば天國地獄とは、未來世に於て遙か西方に極樂ありとか蒼空の上に天國ありとか、天國を以て地方的場所と

なさず、吾人は反て人の心靈活動の狀態の上に天國と地獄とを現象するものとするを以てなり、然らば唯一教にては基督は吾人の罪科を購はんが爲めに死せりとなさず、反て吾人をして基督の言行に鑑みて、正義の爲め人類の爲めに、己れを失ふ者は、即ち其の心靈に天國の狀態了然として反照せりとの實證を示せる者なりとす、何となれば吾人は自己の罪科を他人に負擔せしめ、以て恬然たる能はざる道義的動物なればなり。(自力救濟)

問　信仰の價値に就て如何なる差異ありや。

答　正統流に在ては、聖書又は信仰箇條に明記せるものを以て、眞實なりと信仰するものにして、萬一過誤あるも信徒たるもの其の責に任ぜざる可し、何となれば是れ聖書或は信仰箇條の誤謬なればなり。(無責任)

唯一教は、各自心靈の理非判斷力、即ち自己の道理心を以て唯一なる信仰の標準と定むるを以て、萬一其の信仰にして過誤あらば、必らず自ら其の責に任ぜざる可からず、然れども若し正理公道に適ふものたらば、必らず名譽の天冠を受く可き權利あるものなりとす、(責任あり)

問　教會に就ての差異は如何なりや。

答　正統派の教會は全く寺院或は神殿に等しきものにして、祭壇或は禮拜所とし、宗教的眞理の說教所とし單に宗教的儀式の公行所とするに在り。

唯一教にては、神殿に加ふるに宗教倫理、社會の事物を攻究する處の清き學校とし、或は教會に於て學術の深奥なる眞理を討論する敢て不可なきなり、何となれば萬有の事跡を追究するは、即ち造化

問　の妙趣を味ふものたればなり。

答　布教の目的に就て如何なる差違ありや。

正統派に在て、基督教を他國に布教するの目的は、其の布教地の人民を以て未だ眞誠なる宗教の何たるを解せざるものとなし、隨て其の人民は今や地獄の烈火の周圍に彷徨しつゝある者となし、自ら救主に代りて眞正なる天啓の宗教を宣言布告し、彼れをして自己の宗旨に改宗せしめ、以て救濟の道を成就せんとするに在り、故に在來其の地に行はるゝ宗教は勿論、之に附帶せる總べての風俗習慣を打破して以て盡く自國の風俗習慣に轉化せざれば止まざるなり、換言せば自己の信奉せる基督教の版圖を擴張するを以て目的とするものなるが故に其の新開地に建設せらるゝ處の教會は萬事萬端盡く母國の教會と同一なる性質を有し、少しも其間に差異なからしめんとするものなり。（協會の版圖擴張）

唯一教の布教の目的は、敢て他國人在來の諸宗教を以て全然邪宗門として排拆する事なく、公平に自他の宗義を研究し、各自其の不足を補足せしめんとするに在るものなれば、其の合理にして、人心自然の宗教的感情を滿足するに足る可きものは、自他の差別なく、歡迎し、又不合理なりと認むるものは、之れを學理に照らし、實際の事物に徵して、遠慮なく攻擊し、以て傳道地の國風に至適し、最も健全なる宗教を其の國に建設せんとするものにして、唯一教徒は一方に於て師たると共に一方に於ては學生たるものなり、其の目的は正統派の如く、自宗の教會版圖を擴張するに非ずして、自他相融通し、以て將來人の心靈を安全に依托するに足る可き、宗教の基礎を置かんとするものなり。故に其の國民の何宗に名籍を列するに

問　關らず、自由にして合理なる信仰を抱き、宇宙の大原因たる神(佛と
答　て眞如とても名稱は實躰に非ざれば何れにても可なり)を信仰す
る者と、共に手を就り、一箇人より一國民に及ぼし延て四海の内に
仁愛の道を宣布せんとするに在り。其の布教方法としては、他教の
短所を説破する事なしとせず。然れども之れと同時に其の長處は
飽く迄でも宣揚せんとするものなり、何となれば他教の長處は又
自己の所信の長所にして、之れを顯揚せんとするには、勢ひ迷信誤
謬の執着を破せざるを得ざるを以てなり。(有無融通)

普及力の差異は如何。

正統派に在ては、既でに「眞理にして動かす可からず」と斷定せる標
準を以て、之れを明解すると、せざるに論なく、知らざる點は信じて
之れに從へば可なるものなるを以て、普通一般智識的下層の人を

して信仰(假りに信仰と名づくるも解せずして信ずるは信仰の價
なし)せしむるを得可し、況んや之れを布教するに、人情の弱點たる
死苦の恐怖心を應用し、未だ經驗せざる未來世の天堂と地獄を論
じて以て單簡なる信の一點に依りて、他力の救濟を保證(危險なる
保證なれども)するが故に、未だ宗教的事物に緣の遠かりし人々は
社會に於て相當なる智識と位置を有するにも係らず、一時之れを
信仰する事あるべしと雖も、久しく其の教會内に在て、實際宗教的
事物に思を寄せて考慮せば、何人と雖も怠惰なる他力の救濟、信仰
箇條の上に置ける無責任の信仰及び知らざる點は信仰なり。底の
信仰は終に倦厭を來たし、識らず冷淡無感覺に陷る事あるは實際
の事實なり、故に正統派の教義は、其の普及力を比較的に智識の下
層の人々の間に有するものと云ふを得可し。

唯一教に在ては一定せる信仰箇條を有せざるが故に、殆んど茫漠として所信の標準に迷ふの感なきに非ずと雖も、是れ即ち『尊き彌陀は門外にて拜する能はざる處たるべし』既でに信仰の根據を人の心靈に置ける限り、人として心靈なきもの何れの世にか之れあらん、心靈のある處に活ける標準赫々の光明を放て潛在するにあらずや、蓋し人は眞理を以て之れを遠きに求めんとし、反て自己の內理に眞理の燈光耿々たるを知らざるなり、唯一教の布教は即ち此の燈光の所在を諸君に指示し、以て諸君の反省を促がすに在り、然れども吾人の常に耳にする處は『唯一教は理論高尙なるを以て學識ある者は之れを歡迎す可きものなるも、反て一般の愚夫愚婦をして眞理の曉光を拜せしむるの道に非ず』と、然り論者と雖も已でに智識的の人々の歡迎すべき此の公平合理なる道たるを知らば、何ぞ百尺竿頭一歩を進めて、吾人の布教は空理を天外に談ずる者、未來の天國地獄を說く者に在らずして、苟も人間の心靈を指ざして、其の反省を促がす者たるを知るに至らば、一考を費さゞるも猶ほ愚者の心靈も亦自ら省察するの力あるを知るに至らん、何となれば人にして自ら反省するの力なきに、何を以て普通宗教家の主張する遠き未來の賞罰、天國地獄の神秘不可思議の幽理を覺知するを得んや、論者は愚者にして猶ほ遠き未來を見るの明ありて近き自己今日の心の狀態を見るの明なしとするか。是れ所謂『秋毫の末を察して輿薪を見ざる』の類に非ずして何ぞや。宜なりイソップの物語に曰く『人の眼は先きの方に向て顏面に位せり故に後方に在る自己を省る能はず』と。是れ論者の意を吋度せる者なるか。

唯一教は正統派に比すれば否定する處のみにして破壞的即ち消

極的なりとする批評に對し如何なる答辯ありや。

答　此の如き批評は、所謂近眼者流皮相の見にして、事の實際を知らざれば、固より齒牙に懸くるに足らざるが如しと雖も、世間は往々皮相の見に誤らるゝ例無しとせず、故に今左に數條を相對比し、以て何れか消極にして何れか積極なるやを知るの便に供せん。

一、正統派にては三位一躰の教説を信仰して、數理上の原則を否定し「パーソン」(個人)の意味を曲解す。

唯一教にては三位一躰の説教を否定す、然れとも教理上の原則と「パーソン」(個人)の意味を曲解せす。

一、正統派にては神と宇宙の繰を遠けて世界を以て既でに惡魔(消極)の配下に投下せられたりとす。

唯一教にては神は宇宙の内外に遍滿するものなれば、此の宇宙は善意(積極)の世界なりとす。

一、正統派にては惡魔(消極)の存在を信ず。

唯一教にては惡魔の存在を此の善(積極)の宇宙に許さず。

一、正統派にては基督を神たりと信じ、單純なる人間たるを否定す、

唯一教にては基督の神たるを否定するも、人たるを認定し、人間必らず基督の如く純潔なる生涯を遂くるを得べしと信ず。

一、正統派にては人生の黄金世界は古くアダムの時代に在りとし、以來の人間は盡く墮落(消極)せりと信ず。隨て人間の價値は滅亡(消極)なりと信ず。

唯一教にては黄金世界は將來に在るものとし、人生は決して墮落に非ずして、昇進(積極)なりと信じ、隨て其の價は永生(積極)なりと信ず。

一、正統派にては人は悪魔(消極)の配下に在る奴隷なりと信ず。
唯一教にては人は神(積極)の子女たるの權利を有すと主張す。
一、正統派にては基督教のみを以て天啓なる宗教なりと信ずるも他の教法は邪道異端なりと否定す、故に基督教を認定(積)するも他教一切を排折(消)す。
唯一教は、天下の諸宗教は基督教たると他教たるとに論なく、等しく或る意味に於て天啓たるも、亦或る意味に於て人爲なりとす、故に單に基督のみを認定せず(消極)と雖も亦他教一切を否定せず(積極)、
一、正統派にては、聖書六十六卷のみを以て神勅なり、無謬なり(積極)と認定するも、他の一切の經典を以て盡く聖典に非ずと否定(消極)す。
唯一教は聖書中に誤謬(消極)の混交せるを認定するも亦一切他教の經典にも誤謬のみならず眞理の現在するを認定(積極)す。
一、正統派にては基督の奇跡を認定(積極)するも、他宗の奇跡を盡く否定(消極)し、且つ人智の價値を否定(消極)す。
唯一教にては、奇跡は何教のものも通例認定(消極)せず、然れども合理的事實即ち人智の價値を認識(積極)す。
一、正統派にては儀式を認定(積極)す。
唯一教にては儀式に拘泥せず、然れども其の精神は認定(積極)す。
一、正統派にては聖書の文字に拘泥す。
唯一教にては文字に拘らず其の精神を看破す。
一、正統派にては口に稱ふる祈禱をもて神の必聽を期す
唯一教にては反て勞動を以て懇求の目的を達すべしとなす。
一、正統派にては比較的愚者に普及するを得べし。

唯一教にては比較的智者に歡迎せらるゝを得可し。

一、正統派にては他力(消極)の救濟を以て安心す。

唯一教にては自力(積極)の救濟を以て勤勉す。

一、正統派の教理は實驗學派の進歩と反比例を爲して退歩(消極)せり

唯一教の氣運は科學の進歩と共に急速なる進歩(積極)を爲せり。

一、正統派にては其の信仰箇條を信仰(積極)するも、人間各自の道理心を否定(消極)す。

唯一教にては信仰箇條を以て信教の自由を束縛せず、反て各自心靈の道理力を認定(積極)す。

其他の比較は、茲に一々數ふ可からずと雖も、要するに正統派は、只だ自派所定の教權にのみ固執するも、反て一般普通の道理を否定するものにして、人若し道理心を撲殺するに非ずんば、全然之れに服從す可からざるものなり、之れに反して唯一教に於て斯る頑迷の諸説を否定するは即ち人をして自殺的信者たらしむるを欲せず、充分自家が神の子女たる權利あるを認識せしめ、正當なる信仰を建説せしめんとするに在り、故に普通の基督教に於ては、此の人世を以て實に厭ふ可き惡魔の配下に墮落せるものとし、一意に未來の天國を望み、現世の生活よりも未來の生活に重きを置き、唯一教にては此の人生を以て昇進的にして實に有望のものとし、人は刻下現世に生活せるものなれば、遠き未來よりも、重きを近き現在に置くものなり、何となれば現在の生活は未來生の原因となるものたれはなり、略言せば甲は厭世的にして乙は樂天主義なり、要するに唯一教は、正統派に比して否定する處の量少くして、認定する處の圍範廣大なり、之れをして猶ほ消極的と云ふを得可くんば、吾子又何をか云ん、敢て大方志士の公判を俟つ。

信仰の表白

一吾輩は、神即ち天父の實在し給ふを認識す、而して其の靈智、其の正義、其の仁愛は、普く宇宙萬有の内外に圓滿普遍なるものなりと信ず。

一吾輩は、人として誠實、正直、尊嚴にして思想及び生活(即ち言行)の潔白ならん事を期す。

一吾輩は、一家、一族、鄕黨、朋友、國家及ひ社會の爲めに、盡くすべき義務あるを信ず。

一吾輩は、天に對し、同胞に對し又自己に對して其の義務を果すは、人間生涯の事業なりと信ず。

一吾輩は、肉躰の生死は以て人の正義を隕益すべきものに非ざるを信ず。

一吾輩は、四聖人を以て神の此の世に遣はし給へる大教導師なりと信ず。

一吾輩は、天父の子女たるの故を以て、四海兄弟主義を貫徹せん事を期す。

一吾輩は、死も亦進化の大法に服從せざる可からざるを以て、人は死の爲めに其の進化を停止せられ得可きものに非ず、之れによりて益々進化の深奥に到達するを得べきものなりと信ずるを以て、未來世存在の企望は空想に非ずと信ず。

明治三十年十二月廿[illegible]日印刷
明治三十年十二月廿[illegible]日發行

著作兼發行者　神田佐一郎
東京市芝區三田四國町廿六番地

印刷者　高田乙三
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所　日本ゆにてりあん弘道會
東京市芝區三田四國町二番地

76
180

76
180

Ⓜ

021063−000−0

76−180

登高自卑

神田　佐一郎／著

M30

ABI−0923